
烏が笑い、猫が笑い、海月が笑う

白草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳥が笑い、猫が笑い、海月が笑う

【Nコード】

N39080

【作者名】

白草

【あらすじ】

公園の滑り台の上で『赤とんぼ』を聞きながら、僕は繰り返される最低な一日の記憶を消去しようとする。塗り重ねようとする。さあ、なにで塗り替えようか。この公園に現れるのは、いつもだいたいい鳥と、猫。それならば、彼ら、彼女らの手を借りよう。現実逃避を、始めよう。

象を模した滑り台の一番上に座りながら僕は一人で歌を歌う。錆色の衣を纏ったスピーカーから流れてきた『赤とんぼ』を復唱するみたいに口ずさんで、僕は待つ。

友人ではない。そもそも僕に友達なんていないしこの公園に人がいるところなんて見たことがなかった。

触れば手の平が錆色に染まってしまうような背の低い鉄棒が象の滑り台の向かい側に設置され、鉄棒の左手、公園の角には小さな砂場があるけれど足跡はない。かつては色鮮やかな花が咲いていた花壇が公園を囲んでいて砂場の向かい側の角までブランコが置かれている。遊ぶ人なんていないのに、ブランコは風に揺られて嬉しそうな声を上げていた。

小さい頃には両親と一緒に遊んでいたという公園をぼんやりと眺めながら『赤とんぼ』のメロディを口ずさむ。そろそろ来るだろうと思っていいたら、もう来ていた。おんぼろのスピーカーの上にそいつはいて、僕を睨みつけていた。

喪に服しているかのような黒はその色を際立たせるために夕方現れる。そして僕たちを見下したような声で鳴きながら夜の到来を告げるのだ。そう、これからは彼らの時間。僕たち人がこの街を支配する時間は終わり、僕は誰からも干渉されなくなる。両親との関係は良好だった。

スピーカーの上の烏が口を開いて仲間を呼んでいる。僕に「去れ」と言っている。烏が鳴くから帰ろう。クラスメイトたちはもう家に帰ってゲームをやっている頃だろう。だから烏の言う通りにしよう。象の鼻の上を滑って地面に足がつく。滑り台の左手にはペンキの塗られたタイヤが地面から半分だけ顔を出していてその空洞に猫を飼っている。烏が来るまではいなかったけれど今は違う。三匹はいるな、とタイヤの集まりを見つめる僕を烏がスピーカーの上から見

下ろしていた。阿呆、阿呆と鳴きながら。

鳥にまで馬鹿にされてしまった。そんな風に思っていると、タイヤの空洞から猫が姿を現した。三匹なんてものじゃなかった、十二匹いた。合計二十四個の瞳が僕に向けられていて彼女たちからも「どうして出ていかない？」と責められているような気がしてしまう。結局僕はどこにいても馬鹿にされてしまうのか。

滑り台の右手にはコンクリ製のトイレがある。手洗い場の水は綺麗だろうかと錆色に汚れた手の平を見ながら思う。そういえばこの公園には水飲み場がない。僕はもう鳥を見上げない。猫の瞳を見たりしない。だから都合何個の瞳が僕を射抜いているのか、この公園から追い出そうとしているのか知らない。ゆっくりと歩きながら家に帰ってから何をしようかと考える。こういう雰囲気には慣れていた。日常茶飯事だった。僕の背後では相変わらず鳥が阿呆と鳴き、猫が嫌、嫌、と鳴いていた。

「よう、タカヤ、こんな所で何してるんだよ」

最悪のタイミングだった。公園の出口には胸の前で腕を組みながら僕を馬鹿にするような表情を浮かべたクラスメイトの姿。ここで会うのは初めてだった。どうしてだろう。鳥と猫の鳴き声が聞こえない。もしかしたら彼らがこいつを呼んだのかもしれない。僕の気分を害すのには最低な最適解だった。だけど全部が全部最悪なわけじゃない。僕は手を洗っていなかった。綺麗になったものが汚れるのは見ていて気分が悪いから、ちょうどよかったと思う。

「ああ、すつきりした」

そう言っつて、僕に唾を吐いたクラスメイトは公園から出ていった。その様子をいつの間にか集まっていた十数羽の鳥とたくさんの猫が眺めていた。

久しぶりに人の足跡が付いた砂場は喜んでいるのだろうか。地面に横たわったまま口の中に入り込んだ唾を吐きだして、立ち上がったから服に付いた砂を払い落す。冷静にならなければ、と考えなが

らも砂場に怒りをぶつけるのを止められなかった。爪先で何度か砂をほじくり返した。

いつの間にか空の色は茜から黒へと変わっていた。猫の鳴き声は嫌、嫌と、相変わらず聞こえていたけれど烏の鳴き声は聞こえなくなっていた。彼らの時間は終わり、彼らはこの街の支配権を猫へと受け渡したのだらう。

これからの時間は猫がこの街を支配する。

ああ、なんてくだらない妄想なんだらう。僕にとっての最悪な災厄が、体の中に溜まったヘド口のような痛みが、僕の幻想を嬉々として打ち壊していくのが感じられた。

痛む体を引きずってトイレまで歩き、汚れた部分を洗っていると猫が集まってきた。彼女たちは嫌、嫌と鳴きながら僕を公園から追い出そうとしているのだらうか。きっとそうに違いない。

足を振ると驚いたような声を発する猫。しかし彼女たちは何度も近づいてきてその身をすり寄せてくる。僕に同情しているのかもしれない。慰めようとしているなんて思えなかった。

見上げた空では満月が黄色く輝いて街を照らしていた。どこにいても誰が誰なのか見分けられるように、と。昼の空に浮かぶ月はクラゲのようで頼りなくて、夜になっても地上の生き物を嘲笑っているような感じしかないのに、どうしてか今日だけは違った。

僕はしばらく公園で猫たちと戯れ、月の光を感じ、頭の中でリフレインする『赤とんぼ』に、まだだ、まだだ、と抵抗しながら帰宅の時間を先延ばしにしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3908o/>

烏が笑い、猫が笑い、海月が笑う

2010年10月18日19時25分発行